

俳句

大津俳句会

冬菊のふり絞りたる終の色

井芹眞一郎

滑り台子等の帰れば落葉降る

秋山 恵子

山茶花の咲くより零れはじめたる

市原 初女

冬麗や羽田へと発つ一番機

江藤 みち

山茶花の知らぬ間に咲きこぼれ散り

大塚喜久子

しずかさや青空深き今朝の冬

坂本 セキ

一木に銀杏黄葉の膨らみぬ

佐賀 久子

幾重にも空へ重ねて山紅葉

堀川 妙子

カレンダー一枚となり日短

武藤 規子

幸せの真ん中にゐる七五三

渡邊佳代子

俳句

つのはな句会

孤独なんて放つとけ文化の日の猫よ

星永 文夫

天高し胸の湿原消えて晴れ

水野 春子

宇宙には国境はなし冬うらら

梅木トキエ

風らららきことワタシの赤まんま

塚本 洋子

秋の声ハタとおさめる象の耳

酒井 豊美

廢屋も容れて一村柿花火

志賀 孝子

アールグレイの紅茶に立冬の意気

田上 公代

軒低き八百屋の奥にともる秋

木庭 杏子

平成の汚点を広げる冬の虫

矢嶋 道子

秒針の震えとらえて冬が来る

上杉 波

短歌

大津短歌会

廢村を告ぐる紙面におののきぬ

吾が郷里も雲海の中

吉永 恵子

八十路こえ続けて来し体操教室の

来し方話す食事会

管野 静

新築は子ども世代の家なれど

プラン立て待つ入居の日を

豊岡ミツル

ゲームなき我らが時代の夏休み

白き夏雲笑って見ていた

渡辺佐代子

幼な子が母恋う如く三キロの

小さき老犬懷に寝む

岩下 文代

永遠と今とを結ぶ星空に

常に孤独の月影清やか

小平 善行

短歌

万年青短歌会

秋晴れに鞍岳ながめ思い出す

背負い登りし孫嫁にゆく

山内 信子

安らかな姪の面輪おもわのやさしかり

止めどなく落つ涙ばかりが

立野 誠子

冴え渡る十六夜の月眺むれば

亡き母遠く思う秋の夜

中山 春代

彼岸花赤きまつ毛をそり返し

きんちやく田の旅に一面の赤

大林 律

十六夜の月に団子と芒を供え

夜毎の月を見る二人宴

磯崎テル子

笛太鼓飾りおろしの馬が来た

どよめき起る病院の庭

合志 桃花

それぞれに甥姪の言葉嬉しかり

夫婦そろいの卒寿の祝

合志 妙子

老いばれの姿見せじと踏張れば

おのづとゆるる吾が影ぼうし

河北 幸一